

大転換期を乗り越える新たな視点と経営 ～儒家と老荘思想から次代の経営リーダーの要諦を学ぶ～

株式会社 イメージプラン 代表取締役社長
老荘思想研究者

● 田口 佳史



(本稿は、2012年6月に開催した「企業研究会2012年総会記念講演会」での講演要旨を、加筆・修正したものです)

1. いま我々は大転換期の真ただ中にいる

(1) 文明の大転換

21世紀の2012年を生きる我々の最大の眼目は、大転換期の真ただ中にあることだ。大転換期とは文明の大転換であり、文明の転換の最たるものは西洋近代思想からの転換である。西洋近代思想の役割が見事に果たされ、次にどうするのだという状況になっている。ややもすれば19～20世紀は西洋に引っ張られてきた時代だが、21世紀はグローバリゼーションで、グローブ（球体）として東洋と西洋が相まって行動していかなければならないときである。そこでいま、まさに我々からの東洋思想の提供が強く要請されており、それに一生懸命応えている、それが私の仕事の第一と言ってもよい。

(2) 明治維新とは何か

これを我国について言えば前の文明の大転換は明治維新だ。近代国家への脱皮とは要約すれば3点セットを揃えることであった。近代国家の3点セットとは、法体系、政治制度、経済システムである。政治制度は議会制民主主義、経済システムは資本主義である。我々はこのシステムで150年間運用してきたわけだが、いま、これらが大きな問題を抱えてきており、転換が強いられている。

2. 何が問題か

東洋思想、特に儒家の老荘思想では、「陽極めれば陰となる。陰極めれば陽となる」「善極めれば悪となる。悪極めれば善となる」。つまり、この世の中の1つの動きとして、あるものは、最初は陰でよいという状況で進んでいくが、ある部分から全く逆の状況に変わってしまう。先ほどの3点セットも、いまや若干の手直しでは済まないほどの転換を我々に強いている。いま、そのような前提に日本企業が置かれていることを、理解していただくことが重要だと思う。それは、西洋人と話していると、むしろ西洋人の方が切羽詰まった状況を我々に投げかけて、西洋の思想ばかりではなく、東洋からもっと有効な哲学思想を出してくれという要求が強まるばかりだからだ。日本の場合は、ややもすれば、西洋といっても完璧に西洋化されたわけではなく、まだどこかに東洋が残っている状態であるから印象が薄い、まだ自覚が足りないのである。

(1) 法体系

では、何が悪いのか。まず、法体系である。法律国家であるから、当然、法体系は極めて重要だが、余りにも法を万能とする状況になっている。『論語』の一文に実に的を射た指摘がある。「子曰く、之を道く^{みちび}に政を以てし、之を齊^{ととの}ふるに刑を以

てすれば、民免れて恥づる無し」。「之」とは国家や会社、教育機関などを入れていただくといい。何か人間組織を導いていくために法律（政）をもってしたり、秩序正しく整えるために刑法・刑罰をもってすれば、「これは法律に違反していると思うが、うまくやったおかげで何のおとがめもなかった」などと、どんどん恥の概念が薄れていき、社会の根本が傷ついてしまう。

では、どうするべきか。「之を道くに徳を以てし、之を齊ふるに禮を以てすれば、恥づる有りて且つ格る」。人間は人格者であるリーダーに導かれたり、その人間を慕うことで組織が整えられていく。すると、みんなは「恥ずかしい。あの人に比べれば私はまだ至らない」という恥をもって自分を制御する。1人ひとりが自己から整え、人格形成される。人格者がモノをつくり、モノを売り、ビジネスを行うところに要点がある。法が万能であることをいかに緩和し、そこに人格をどう入れていくかが現在問われている。

（2）政治制度

これは議会制民主主義のことだが、これも弊害が多くなっている。明治時代は日本は早急に産業革命を経験する必要があったため、中央集権となった。最初は「陽極まれば」で良かったが、「陰となる」で弊害が出てきている。

そもそも政治とはどういうものか。『書経』には「民は近づく可く、下す可からず」というくだりがある。つまり、民という存在があって初めて政治リーダーの存在がある。ただ政治リーダーだけがいるのではなく、民があってこそそのものなのだ。そう考えると、民の心に近接して、常に民の心を読み取っていく必要がある。「下す」とは、民を見下すことである。逆説的に言えば、衆愚政治も民を見下している。真に民が何を望んでいるのかを探ることが中央集権のできるのか。

さらに、「民は惟れ邦の本なり。本固ければ邦寧し」。民が中心であることを再度取り戻すような、ウェブとモバイルの時代を活用して、1人ひとりの国民の意思や意見が国に反映されるような仕組み、個人というものが際だって力を持ってきた時代でもあることを考え抜本的改革を行っていかなければならない。

（3）経済システム

次に、経済システムである。これは資本主義のことだが、リーマン・ショックを挙げるまでもなく、弊害としてあまりにも強い金銭物質至上主義がある。さらに、ハートフルサービス、顧客に対するカスタマーサティスファクションと言うものの、最後は計数至上主義で終わっている。

日本の成り立ちや伝統を顧みれば、「草木国土悉皆成仏」という言葉がある。我々が使っている素材や部材、株主にしろ、俗に言うステークホルダーは全て、人間として同一のものであり分けられるものではない。さらに言えば、いま、企業ではしきりとダイバーシティーが喧伝されているが、本来その根源にあるべき思想として「万物一斉」がある。人間のみが全てではなく、全ての動植物も生きとし生けるものとして考えれば同一である。我々は多様性に対する認知を考えていかなければならない。

西洋合理主義科学の1つの考え方の中に、機械論的世界観があった。世界を機械として見ることは当初、分かりやすいので非常に有効であったが、だんだん人間すらも機械の部品として見ていき、古くなったら部品を取り換えればよいという発想になりかねない。いまは極めて創造性を要求される。人間は考える葦というが、考えて英知を振るうところに意味がある。その英知は生命力から出てくる。したがって、生命論的企業観に転換をする必要がある。

1868年の明治維新から150年ほどたった現在、明治維新からの転換が行われなければいけない。それがいま、我々に要求されているのである。

3. 何をどのようにすべきか

（1）アジアの時代

企業の場合、何をどのようにすべきか。18～19世紀はヨーロッパの時代、20世紀はアメリカの時代と言われていたが、ようやくアジアの時代が来た。待ちに待ったおひざ元の時代が来たことを、我々アジア人は喜ばなければいけない。

そして、私のように企業の周辺にいる人間から見れば、同じアジアの国でも日本は違う。さらに若干誇らしく述べると、日本は日本らしさという

点でかなり上回っている部分がある。私のように四十数年、四書五経あるいは老荘思想を研究している人間から言えば、日本のような儒教も老荘思想も発生地である中国にはほとんど残っていない。仏教も、インドの仏教学者と話しても、日本的な仏教や禅仏教は通じない。つまり、日本は神道があって、そこに儒教、仏教、道教、禅が外来文化として入ってきて、世界的な思想哲学が蓄積されているのである。我々はそういう文化で2000年余り活動してきて、世阿弥、利休、芭蕉などの多くの文化人がいる。日本企業の独自性はそのような日本伝統精神文化から生じていることを自覚する必要がある。日本はアジアの他国とは著しく異なった独自性のある素晴らしい精神文化を持っているのだ。

これを説明する際、我田引水つまり独りよがりにならないために、地理的特性から説いていきたい。それは、地理的位置付けは変えようとしても変えられないからだ。

(2) 日本の地理的特性の1

日本は森林山岳海洋国家である。特に最近、海洋性が大変脚光を浴びている。足摺岬の漁民は明治期まで毎月1回バンクーバーまで出かけている等、海洋性は計り知れないグローバルゼーションを持っている。しかし本日は、森林山岳に絞ってお話しをしたい。

我々は森林山岳性から、神の発見を得たと言ってよいのではないか。人知を超えた強い力が森の奥底の「隈」から生まれた。「隈」の活用がずっと変換されて、隈が「かむ」になり、「かむい」になり、「かむい」が詰まって「かみ」になったという説がある。日本は多神教国家であり、多神教地域は世界に3カ点（日本、ギリシャ、インド）しかない。その中でも、日本は他と違う要素が多い。「これが神である」というものを信仰するのではなく、「自然」に実に親愛感を持つ民族である。我々は神の像を持っていない。したがって、「これが神である」と指し示すことはできない。なぜなら、神と言えは自然だからだ。宗像神社や大神神社のご神体は島や山である。神、自然との共生を「ともいき」と言うが、そういうところから生まれた信仰心である。現在、21世紀の

キーワードに「自然との共生」が挙げられているが、このような我国の伝統精神文化の基底をなす考え方を我々は再度自覚する必要がある。

ここで、皆さんに問題提起したい。「これが神だ。これを信じなさい」と言われれば、それは誰にでも分かりやすいが、「あの山が神だ」「あの岩が神だ」と言われて信仰心を持つことは、ある1つの条件が適わなければ成り立たない。それは、受け手に鋭い感性と深い精神性がなければならない。そう考えると、我々日本人の特性として、鋭い感性と深い精神性がまず挙げられる。トヨタ自動車の「かんぱん方式」に代表されるように、例えば10秒かかるのを3秒にするとか、10歩で受け渡すものを3歩にするなど、我々は見える部分で努力してきた。しかし、これからの勝負は、見えないものに心を尽くすことである。見えないものは、人の心などである。我々には、2000年もの東洋思想の根源である「見えないものを見る」という伝統があり、もう一度復興させることが極めて重要である。その最たるものが神であった。神は見えるのか。我々の文化には、あたかもそこに神がいるように、神と人が共同して生きているという状況がある。これが地理的特性の第一である。

(3) 日本の地理的特性の2

地理的特性の2番目は、日本がユーラシア大陸の東端に位置していることである。そのおかげで、発生地がインドや中国であっても、人類の遺産として誇り得べき思想哲学が全て東へ東へと流れてくれた。したがって、日本は儒・仏・道・禅・神道の思想の集積地である。世界広しと言えどもこのような地域はないだろう。したがって、日本は溜り文化である。溜り文化の発露は、味噌、醤油などの発酵文化である。我々には発生地にもないような極めて崇高な香りと味わいを持った儒教、仏教、老荘思想、禅がある。これほど素晴らしい知的遺産に恵まれた地域はないということを再認識する必要がある。

4. 企業が考えるべきこと

以上、紹介したような特性をどう生かしていく

べきか。私は企業を研究対象、あるいは実践活動の場にしようと決心したとき、「企業は成熟したか」というテーマを掲げた。40年来このテーマに取り組んでいるが、他のプロ人間集団のように成熟させる必要がある、させていくべきではないかとも思っている。他の人間集団とは、例えばマンチェスター・ユナイテッドであり、世界有数のオーケストラであるベルリン・フィルであり、映画づくりの黒澤組や小津組などである。これらの人間集団はいろいろな特性を持っているが、彼らと比較して、同じ人間集団として企業が1～2ランク上がっているかどうか。我々は戦後、高度成長期を生き、安定期を生き、いまは転換期を生きている。人間集団としての優秀性がどんどん向上していなければ意味がない。そこに他のアジア地域の企業集団と日本集団の相違点も求められるべきだと思う。

他の人間集団が持っている優秀性とは、まず、プロフェッショナルだということ。2番目に、タイプは違うが、リーダーシップ。3番目は、創造と秩序に長けていること。

(1) プロフェッショナル

プロフェッショナルを日本語では「玄人」と言う。これは老荘思想の言葉である。「玄」には実に深い意味がある。「玄」とは黒い、あるいは暗いことである。玄鳥という、黒い鳥、ツバメなどをいう。「黒い」が「暗い」になり、「玄人」になったのは、玄人とは、「暗いところが見える人」だからだ。暗いところとは、明日とか、遠いところとか、人の心などである。遠いところとは、皆さんの世界では需要予測とか、顧客のニーズとか、人の心が見えるということだ。

そういう観点でいまの私どもの方法論を見ると、改善の余地はたくさんあるのではないかと。1例を挙げると、いま、何か問題が起きたときに、我々は必ずそれを「分析してみろ」と言う。これは間違いではないが、分析以外に有効な手立てはないかと考える必要がある。例えば、桜の花をつけなくなった桜の木に、花をつけなくなった理由を探ろうとして、薬品などを入れた試験管に桜の葉をつけて、色の変化から養分が足りないことを分析し、肥料を的確にまくだろう。この方法も素

晴らしく、用具さえあれば誰でもできるという普遍性がある。だが、生命力がなくなったため花が咲かないわけだから、桜の木の生命力を葉っぱという最も生命力が弱い部分で測っていいのだろうかという疑問が生じる。

この樹木の最も生命力が強い部分は根っ子である。たいていの人間は、根っこは掘ってみなければ見えないと言うが、桜守は桜を生身で見て、悪い個所が分かる。なぜ見えるのか。人間には並外れた強烈な崇高と言えるような能力が備わっている。これを「包括的直感力」という。この直感力は日本人のお家芸である。柳生新陰流の極意は、前のように後ろが見えることであると言われている。後ろがなぜ見えるのかと言えば、気配とか心眼というもので見ていくのだが、人間にはそういう世界というものが能力として与えられていながら、それを発揮することなく一生を終えている。いかにも残念である。

人間の究極の能力は包括的直感力である。これを鍛えるには、鍛錬という言葉が最も適している。鍛錬とは精通することである。精通するとは、通り越すことである。表面を通り越して、その奥深にあるそのものの精神と自分が通じ合うことを精通という。どんなものにあっても精通できる。そこで、「草木国土悉皆成仏」とか、すべて万物は一斉なのだという考え方が生きてくるわけである。稽古という言葉も「古を稽^{いにしえ}える」と読む。これは中国古典に多く出てくる言葉だが、昔の達人がなぜその領域に行ったのかを考えながら行うのが稽古である。そういうものが我国特有のキャリアであった。このキャリア観を再度復活させることはできないか。

見えないものを見る、聞こえない声を聞く、捉えられないものを得るということが東洋文化の根底にあり、特に日本文化には非常に色濃く存在し、「無」の存在を常識とする。

つまり、この世は「有」と「無」から成っている。有とは見える世界であるから有限であるが、その背景に広がる広大無辺な無の世界へ行けば無限の可能性が出てくる。これがわが国伝統の思想哲学である。何であれ全てこの考え方が生かされている。こういう考え方が企業の商品・サービスに生きてくるか、極めて重要だと考える。

長谷川等伯の「松林図屏風」(国宝)はこういう考え方の極みといわれている。この絵は朝靄に煙る松林で、晴れていたらどれほどうっそうとした松林が現出するかを前提に鑑賞するのである。見る人と描き手が共作しているところに素晴らしさがある。商品も、使い手と送り手が共作して可能性が広がっていくような、そのような部分が日本のお家芸なのだとすることを忘れないでいただきたい。

基本的に、我国文化の世界では「極める」ということがある。極めるとは、必要最小限のもののみとする。簡潔、簡素、シンプルが極めて重要なキーワードになっている。そこに、合理効率性を超えた豊かさがある。それは千利休の朝顔の茶会に代表される。「一をもって多とする」という考え方だ。最近、アメリカの経営書にはinvisible, intangible, inaudibleという言葉が頻繁に出てくる。強いて言えば、これらは全て東洋思想である。ぜひ、こういう点でプロの集団になっていただきたい。

(2) リーダーシップ

次は、リーダーシップである。特に江戸時代300年にわたって、一級の武士に非常に厳しく要求されたことがある。たくさんあるが、3点のみ紹介する。

まず、「不動心を持つ」ことである。平時、リーダーはあまり活躍の場がない。つまり、各部門の人材が一生懸命自分の責務を果たしてくれればいいのだ。しかし緊急・異常態勢になればなるほど、リーダーシップが重要になる。つまり、いわばリーダーとは有事に力を発揮すべき人材である。したがって、「平時は有事の備えにあり」であり、そういう意味ではその備えの最たるものが、リーダーシップの確立である。その点で、まず慌てず騒がず、沈着冷静に、泰然自若であらねばならない。江戸時代、武士は「自失」になった瞬間、出世の階段を落とされてしまうため、幼少期から不動心を鍛える訓練が非常に重要であった。

孟子の「自ら反りみて縮くんば、千万人と雖も、われ往かん」は、こういう気概を持って生きてほしいということだが、少しの反対で自論を失ってしまうようでは仕方がない。そういう意味

で、基本は正義と道理である。つまり、公や自社のため、社会のため、国のため、世界のためという精神と、多くの人間のための思う道理に基づいているからこそ胸が張れ頑張れるのだ。そこには私欲性がないことが重要である。江戸時代、日本人は士農工商の分け隔てなく、このことは要求された。

2つ目に要求されたのは、「大局観を持つ」ことだ。これも着眼を高くすることに代表される。大局観は、根源的にものを見る、長期的にものを見る、多様性を持って見るという3つからできている。根源・長期・多様を思考の確立の中にどのように入れていくかが重要である。瞬間的にこの3要素が総合的に発揮されて思考が確立されることが江戸期のリーダーに要求されたのである。今後、この根源・長期・多様という思考法を持ったリーダーを育てなければならない。

3つ目は、「自己の確立」である。つまり、3つそれぞれが全部つながり、重なり合っている。そういう意味で自己の確立は極めて重要であり、状況や環境に左右されない自分をつくる。己の人生を確固たるものとして確立をして、愉快的人生を歩もうとするのが江戸時代の基本であった。「嫌なことよ、来るな」と神仏に頼っているのではなく、嫌なことも「サア来い」と言える自分をつくるのである。したがって、四書五経に3歳から馴染んで、15歳の元服まで徹底的に四書五経教育を行ったのである。状況や環境に左右されない自分をつくる。つまり、内面志向である。これは自己鍛錬精神鍛錬の持続を持てば、揺るがない自分をつくれる。いま、各社が考えておられることの第一は、ぶれない、揺れない管理職・リーダーをつくることである。

いま挙げた3つが具体的にどのように生きてくるか。江戸期有数の儒者として世に名高い佐藤一斎は『重職心得箇条』を著した。これを書けるのは、四書五経を徹底的に自家菜籠中のものにして、自分の血や肉になった人間である。そういう人間はどのぐらいのプロフェッショナル性やリーダーシップ性を持っているかという証として『重職心得箇条』を読まれるようお勧めする。

「政事は大小軽重の辨を失ふべからず」。「政事」は経営と言ってもいい。経営の要点は、第1に、

起こった物事の大小か、軽重かを区分する。さらに、緩急先後の順番を誤らない。リーダーとは、重大事を担うから重役という。そういう意味で、まず大小軽重、緩急先後の区分をつけられる能力を養っておく。これは「徐緩にても失し」、ゆっくりしすぎても駄目であり、「火急にても」、急ぎすぎても駄目である。したがって、物事を客観的に余裕を持って見られるようなスタンスを養っておかなければいけない。そのためには、着眼を高くし、総体を見回すことが重要である。大小軽重、緩急先後を区分して、「これはすぐしなければならない」「これは1カ月後でもいい」「1週間後でもいい」と、「意中に成算を立て」、心の中に算段（プランニング）が立つようであれば駄目だ。その頭の中に浮かんだ計画に基づいて手順を追って指示を出すことがリーダーのあるべき要だと述べている。

もう1つ、「応機と云ふ事あり肝要也」。物事にはここぞというタイミングがある。「機」とは、弓矢を引き絞って瞬間的に放すことである。「応機」とはタイミングに応ずるということであり、そのようなことが肝要ということだ。「物事何によらず後の機は前に見ゆる」。これをそのまま放置した場合、2日後、5日後、10日後の姿が見えなければ駄目だ。その機の動き方を察して、それに対処していかなければいけない。そのときに最もよくないのは、「物に拘りたる時」である。「これを言うとかの人に迷惑がかかるのではないか」「自分に何か責任がくるのではないか」と拘っていると、「後に及んでとんと行き支へて難渋あるものなり」、後で難渋が待っているのである。このような指示ができることやこのような文章が書けることが江戸期のリーダーである。このような言葉がわずか150年前に、我国に伝統としてしっかり生きていたことを忘れないでいただきたい。

（3）創造と秩序

3番目に創造と秩序である。渋沢栄一は「道徳なき経済は経済にあらず。経済なき道徳は道徳にあらず」と述べたが、この言葉を理解することが創造と秩序である。いま、「道徳とは何か」と聞くと、ほとんど「倫理・道徳だ」と答えるが、これは日本の軍国主義時代の遺産である。組織の安

定を保つため、社会・組織に指示されるとおりにやっていくのが道徳であると言っている。道徳とは、そもそもこの宇宙の総体に広がる宇宙の秩序形成を述べている言葉である。そういう意味では宇宙の秩序は乱されることなく行われているのである。それを地上のものにしていこうとしたのが、『論語』に代表される孔子であり、それを「礼」で代表して説いているわけである。したがって、秩序が乱される「非礼」「無礼」の場合は秩序が壊れるところである。朝礼は、今日一日、社員や仕事に対して礼を尽くし、秩序を保って、所期の目的である生産性を上げるという意味である。それも重要ではあるが、実は江戸期はそれだけを言っているわけではなかった。

道徳にはもう1つ、創造という大変重要な意味合いがある。宇宙の根源は秩序形成もしているが、さらに重要な役割として、物事を次から次へと創造している。したがって、エネルギーでダイナミックなクリエイティビティ（精神的で動態的な創造活動）という意味が道徳にはある。そういう意味では、渋沢栄一は「創造活動なき経済は、経済ではない」と述べているのだ。ここが実に重要である。特に21世紀はエネルギーでダイナミックな創造活動に徹底して行っていかなければならない。

中国古典では、老子の非常に有名な言葉がある。「道一を生じ、一二を生じ、二三を生じ、三萬物を生ず」。「道」とは宇宙の根源である。宇宙の根源が「一を」とは元気ということである。「元気ですか」とは宇宙の根源を表している言葉であり、思想哲学的には非常に重大なことを示している。宇宙の根源が元気をつくっている。元気が二を生じる。「二」とは、陰陽である。陰と陽が三を生じる。「三」とは、「萬物陰を負ひて陽を抱き、冲氣以て和を為す」とある「冲氣」のことである。したがって、本当の創造活動とは、陰と陽という極めて相矛盾して扱ってしまうような2つのものを冲氣で和す。「冲」は、虚無ということである。つまり、没頭、没入して無私の境地に至ることがいかに重要なことを表している。世界的な発明・発見は全てそういうところから生じている。「冲氣」が陰陽を脱する極めて大きな力であることを表している。

ところが戦後の我々は、この陰陽というものがありながら、例えばコストを取るかサービスを取るかという問題を、どちらかを取って解決する。あえて言えば、それはあたかも50点解決法で、これを繰り返している企業は、全員が一生懸命やっているが、いつの間にか50点企業に陥っているだろう。

本来は陰陽図があり、陰陽は相補する関係にあり、ぱったり切り捨てては駄目である。これもいま、ComplementやComplementarityなどと経営書に登場するようになってきた。つまり、相矛盾するものは相補うものである。西田幾多郎などが述べている「絶対矛盾の自己同一」である。したがって、矛盾すれば「待ってました」と取り組むべきである。

例えば、アサヒビールが「スーパードライ」で一世を風靡したが、これはコクキレビールである。これまでのビールはコクタイプでいくか、キレタイプでいくかであった。コクとキレとは相矛盾した状態である。スーパードライは初めて両方の、つまり陰陽を和した商品であった。日本がこれから世界で冠たる商品やサービスを出していくためにも、この陰陽を大切に扱っていくことがとても重要である。

「陰陽和して元と成す」。皆さんも陰陽を和している。陰陽を和したから人間は生まれてくる。人間も男性性と女性性という陰陽を和している。この世の完璧なものは陰陽を和しているものであることを考えてほしい。二元論を超えて相矛盾する2つのものをいかに乗り越えて、両方を加味したものにしていけるか。ここにこれからのマネジメン

トやビジネスのあり方がある。両方を取って完璧になるということである。

その基本には、東洋思想は見えないもの、無の世界を相手にしていることがある。見えないものとは真に顧客が望んでいることである。社内アンケートや顧客アンケートでは現状を前提にした意見が出てくる。しかし、日本のお家芸は本来は見えないものを見る能力であるから、むしろ「あなたの欲しかった商品はこれでしょう」と発売し、顧客が「それが欲しかったのだ」というところにある。ウォークマンはその一例だ。これからは見えないものを見る能力を徹底的に磨き、顧客の予想しない、しかし、待っている商品・サービスをどんどん開発して出す。まさにプロフェッショナルとリーダーシップとクリエイティビティが相まった組織にしていきたい。

皆さんは日本を代表する企業と社員の方々である。祖国を世界中の人から尊敬される国家にしないで、「誰でもよかった」殺人などが頻繁に起こるような社会を、子供や孫に引き継ぐのはあまりにも無責任である。社会の手本は一流企業にある。それは一流の人間で構成されているという暗黙の敬う心や、本人たちの矜持、プライドがあるからだ。しかし、ここ10年、一流企業の不祥事が何と多いことか。つまり、社会を徹底的に裏切ってしまった。現在の日本の混迷の一端はそこにあるのではないかと。皆さんこそ社会のお手本なのだ。一挙手一投足にそういう心を持って、ぜひ立派な人間として暮らしていきたい。そして、健全な社会の復興と世界から尊敬される国家を再興していきたい。

田口 佳史（たぐち よしふみ）氏

老荘思想研究者。一般社団法人「日本家庭教育協会」理事長。一般社団法人「東洋と西洋の知の融合研究所」理事長。「杉並師範館」前理事長。㈱イメージプラン代表取締役社長。昭和17年東京生まれ。昭和47年㈱イメージプラン創業。以来30数年2000社に渡る企業変革指導を行う。中国古典思想研究四十数年。永年にわたり研鑽された中国古典を基盤としたリーダー指導は多くの経営者と政治家を育てた。東洋倫理学、東洋リーダーシップ論の第一人者。企業、官公庁、地方自治体、教育機関など全国各地で講演講義を続け、1万人を越える社会人教育の実績がある。

平成10年 老荘思想的経営論「タオ・マネジメント」を発表。米国でも英語版が発刊され、東洋思想と西洋先端技法との融合による新しい経営思想として注目される。

平成17年 教育改革の重要性を痛感し、教師養成のための師範学校設立に参画する。

平成19年 21世紀の日本の在り方を探求する一般社団法人「東洋と西洋の知の融合研究所」を設立、理事長に就任。

平成20年 家庭教育の重要性を痛感し、親の育て教本「親子で学ぶ人間の基本」（全12巻DVD）を発表する。

平成21年 我国伝統の家庭教育を再興するため一般社団法人「日本家庭教育協会」を設立、理事長に就任。

《主な著書》

「孫子の至言」平成24年 光文社、「リーダーの指針東洋思考」平成23年 かんき出版、「論語の名言」平成23年 大和書房、「老子の無言」平成23年 光文社、「論語の一言」平成22年 光文社、「東洋からの経営発想」平成21年 悠雲舎、「清く美しい流れ」平成19年 PHP研究所、「TAO MANAGEMENT」平成18年 EastBridge, Boston, 「会社を変える」平成11年 日新報道、「タオ・マネジメント」平成10年 産調出版、「不変と先端・経営の道理」平成8年 産調出版、「大転換期・経営の本質」平成7年 致知出版社、「人生尊重なき企業は滅びる」平成4年 ティビーエス・ブリタニカ、「企業の『生存領域』をどう見つけるか」平成4年 マネジメント社、「ビジネス戦士のための幸福論」平成元年 竹井出版（現致知出版社）、など。